

**Neglect** of the mind-body **link** by technological medicine **is** actually a **brief** aberration / **when** <sup>S</sup> **viewed** <sup>V</sup> against the whole history of the **healing** art.

Awareness of the mind's powers **was** lost / as medicine **cast** out all "soft" data, / the information [that's not easily quantified or scientific].

関係代名詞

内容Check!

問 次の各文が正しければ ( ) に○を、誤っていれば×を記入しなさい。

- In old times, people recognized the importance of the patient's mind in the process of healing. ( )
- Until the 19th century, medical writers ignored the effects of positive feelings. ( )
- Modern medicine uses information that is not easy to quantify. ( )

覚えておきたい表現

主語 + be 動詞の省略

ℓ.1 : Neglect of the mind-body link by technological medicine is actually a brief aberration **when viewed** against the whole history of the healing art. 「科学技術的医学によって心身の関連性が軽視されていることは、治療技術の歴史全体に照らしてみれば、実は短期間の逸脱と言える。」

・ when (it is) viewed ... 「…に照らしてみれば」: 主語の it (= neglect of the mind-body link) と be 動詞が省略されている。これは主節の主語と従属節の主語 it が同じ内容のためである。

Ex. **When** (he was) **young**, my father played in the mountains every day. 「若い頃、父は毎日山で遊んでいた。」

rarely 「めったに～しない」

ℓ.5 : Until the nineteenth century, medical writers **rarely** failed to note the influence of grief, despair, or discouragement 「19世紀までは、医学に関して記した人たちは、悲しみ、絶望、あるいは落胆が及ぼす影響を書きそびれることはめったになかった」

・ rarely ~ 「めったに～ない」: rarely は hardly や seldom と同じように、否定を含む頻度の副詞。

used to do 「かつては…したものだ」

ℓ.9 : Contentment **used to be considered** a prerequisite for health. 「心の安らぎは、健康の必要条件であるとかつては考えられていた。」

・ used to do 「かつては…したものだ」: かつてはそうだったが、今はそうではないという意味を含んでいる。

整理しよう! \*段落要旨・構造\*

1 医学における心身の関連性

現代医学: 心と身体つながりが軽視されている。  
治療技術の歴史と照らし合わせてみると短期間の逸脱である。  
かつては

- ・ 否定的な感情が病気に与える影響
  - ・ 肯定的な感情が持つ治療効果
- を忘れることはなかった。

2 現代の医師の問題点

◆ ℓ.11 **however** 「しかし: 逆接」

現代の医師は、患者が持つ治癒力を忘れている。  
(その理由) 薬を通して、一定の病気に対して強い力を持ちすぎた。  
ある医者例

(かつて) 病気の発生前に個人や社会に起こったことを記録。

◆ ℓ.15 **but** 「しかし: 逆接」

医療の科学技術化で記録をやめてしまった。

(経過) 医学が科学技術的になるにつれ、数量化できない情報や非科学的な情報が追い出された。

背景知識

●現代医学の病気のとらえ方

『免疫と自然治癒力のしくみ』によると、「古代ギリシア時代には、憂うつな女性は、快活な女性に比べてがんにかかりやすいことが指摘されていたし、20世紀の初めには心労が結核の症状を悪化させることも知られていた」という。つまり、20世紀初頭までは心の働きと病気との関係が分断されていなかった。ところが、1950年代になって「生命現象を遺伝子を中心に説明しようとする分子生物学という新しい学問が誕生し」、この「分子生物学は生物の研究を分子レベルのミクロ(微視的)なもの」に変えたため、医学の「学問はミクロ化し、細分化されていき、ついには生命の全体像を見失うにいった」のだという。一方で、心との関係が密な免疫系についての免疫学も他の学問領域とは異なる独自の発展を遂げてきたが、このことから「免疫系が人体の他の系から独立しているかのごとく誤解されるという副作用を伴ってきた」とし、病気を治す上で「自然治癒力が主役で医療と薬は脇役」と筆者は主張している。

こうしてみると心の働きと身体とを総合的に把握する意義は大きく、ミクロの世界に入り込んで病気の原因などを調べる方法論が根強い現代医学はむしろ見直しが迫られるだろう。しかし、そこから直ちに医者が処方する薬に対しては不安を抱き、それとは対極的な民間療法や健康食品をあがめる傾向に走るのもまた極端であると言えよう。『健康・医療の情報を読み解く』では「民間療法や健康食品は、有効性についても安全性についても医療現場で使われている薬ほど十分に評価されているわけではない」とある。

【深めたい人】: 生田哲『免疫と自然治癒力のしくみ』(日本実業出版社, 2004年), 中山健夫『健康・医療の情報を読み解く 健康情報学への招待』(丸善, 2008年)